

れている)の形を刻むと、その像が化物となって何代も崇り、人を殺すから避けなければならぬ(和田完『サハリン・アイヌの熊祭』一九九九 第一書房 九三頁)という証言を得ているが、少なくともカッコで補われた *sikator-ekah* の解説は、他の地域の情報と混同している可能性がある。

(18) 北海道開拓記念館編『民族調査報告書』二一九七三 三〇頁。

(19) トンコリを演奏することで、村を襲いに来た夜盗を眠らせ、魔神を追う力があるとも言われ(更科源藏『歴史と民俗アイヌ』一九六八 社会思想社 一六七頁)、楽譜そのものではなく(トンコリがシャーマンの祭具であるという説には根拠がない)、その音、若しくは特定の曲に力があるのではないかと思われる。

(20) ただし、世界の初めにいた一つ目の巨大な化物夫婦は、守護神の助力のもと、少年英雄(文化英雄ヤイレス・ポだとう)によって退治される。参考：Ohnuki-Tiemey, *Sakhalin Ainu Folklore*。第一話、村崎恭子『カラフトアイヌ語』一九七六 国書刊行会 昔話一一話。そのほか、文化英雄(ヤイレス・ポ)が守護神(チリキヤンクフ)の指示を受けて化物を退治し、抹消する話もある(Ohnuki-Tiemey, *Sakhalin Ainu Folklore*。第一二三話)。

(21) シカタロ・キナは、おそらくアリウム科の植物で、踏むと青くなると思われる白い鈴状の花をつける(Ohnuki-Tiemey, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*。一一九頁)。

(22) 以上 Ohnuki-Tiemey, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*。六二一～四頁。

(23) 久保寺・知里「アイヌの疱瘡神『バコロ・カムイ』に就いて」で述べられているように、シカトロケ(北海道方言形)がシ「糞」カッ「形」オロケ「ところ」と解釈されるように、疱瘡の跡をシカッ「鳥の」糞の形」と言ったことに由来すると思われる。

(24) 知里真志保「分類アイヌ語辞典植物篇」一九四頁。

(25) 病気が流行する時には、樺太でも猛烈な臭気を有するギョウジャンニクを家の戸口や窓口に吊したり、枕の中に詰めたりした(知里真志保「分類アイヌ語辞典植物篇」二七八頁)。(26) より詳しくは和田完『サハリン・アイヌの熊祭』一九五九 第一書房 三二頁参照。

(27) Ohnuki-Tiemey, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*。六四～六五頁。

(28) Ohnuki-Tiemey, *Sakhalin Ainu Folklore*。第一話のアイヌ語原文より該当箇所を筆者が翻訳。

(29) Ohnuki-Tiemey, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*。六五頁。

#### 付記

本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号20111234)による成果の一部である。

(わかぐち・りょう)／千葉大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員

#### 【緊急特集】 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究

### 韓国の巫歌「ソンニムクツ」(손님굿)

—天然痘の神をまつる儀礼／別神クツ・江陵端午クツ—

邊 恩 田

はじめに

二〇二〇年の三月ころよりこのかた、「新型コロナウイルス感染症 COVID-19」が世界的な大流行となり、非常に多くの人が苦しみ、そして亡くなっている。

この脅威に直面し、忘れさっていた「天然痘(疱瘡)」のことが思い出された。というのも、かつて二〇〇二年六月に韓国の江陵市の「江陵端午祭」で見た巫の儀礼「ソンニムクツ」が、伝染病の天然痘にかかわる内容であったからである。すでに天然痘という病気はないはずなのに、巫による儀礼が実際に行われていることが強く印象に残っていた。

筆者は、五月に連絡があった日本口承文芸学会の企画をきっかけに、この儀礼を思い起こしながら詳しく調べなおすことにした。口承文芸は「現実」のなかでいかにして生まれ、どのような役割をはたすのか、そしてどう伝承されていくのかという

問題が、いま起きている感染症の大流行のなかで生々しく筆者にせまってきた。急ぎまとめたのがこの小稿である。

#### 1 天然痘

過去、人類がもつとも恐れた伝染病の一つが天然痘であったという。筆者の体験をいえば、小学生のときに「種痘(しゅとう)」の予防接種を受けていた。当時、わたしたちはこの伝染病を「ほうそう(疱瘡)」と呼び、「ほうそうにかかると表現し、かかるとはいけない病気だ」という認識を強くもっていたが、その注射の丸い痕が、筆者の左腕に今もはっきり残っている。しかし、一九七六年以降に生まれた人々には、その予防接種の痕がない。なぜならこの年から、日本で「種痘」は実施されなくなっていたからである。

日本の「国立感染症研究所(NIID)」によれば、「天然痘(痘瘡)」は「紀元前より、伝染力が非常に強く死に至る疫病とし

て人々から恐れられていた」と解説し、たとえば一七七〇年インドの大流行では三〇〇万もの人が死亡し、英国では一七九六年に四万五〇〇〇人が天然痘で命を失ったという。しかしこの年にジェンナー(Edward Jenner)が予防法の「種痘」を発明したので、その普及によって世界における天然痘の発生数は減少していったが、なお一九五八年の時点でも、世界三十三カ国での発生数が約二〇〇〇万人、死亡数は四〇〇万人と推計されたというのであるから、その威力のほどがわかる。日本では、明治年間に、二〇七万人患者数の流行(死亡者数五〇〇〇〇〇二万人)が六回発生し、第二次大戦後の一九四六年には約三〇〇〇人が死亡したという。ワクチン接種が普及し一九五六年以降には日本国内での発生は見られないという。

そしてようやく一九八〇年五月に、WHO世界保健機関は、天然痘の世界根絶を宣言したのであった。

以上、わずかな事例だけでも天然痘が非常に恐れられたことがわかるが、その理由は、いうまでもなく感染力が強く致死率も非常に高く、失明や身体に不具が残るなどの後遺症をもたらす、特に幼い子どもに発症が多いことにあった。

しかしそれだけではない。感染すると体中に発疹と水疱が出るが、特に「顔」に多く出て、膿んだあとのかさぶたが取れると、くぼんだ痘痕(あばた)が残るため、一目で天然痘にかかったと知られることであった。筆者やそれ以前の世代は、「あばたもえくぼ」という日本のことわざの「あばた」を実際に見てい

るので、天然痘が治癒後にも社会的な偏見や差別で人びとを苦しめた病気であることを知っている。とりわけ娘をもつ親にとっては、家庭内に入ってほしくない病気であったのだ。

かつて医学の発達が及ばず予防接種がなかったその長い歴史のなかで、人びとはこの恐ろしい天然痘をどう捉え、どのように対処したのであろうか。

本稿は、韓国(朝鮮半島)における「天然痘」にかかわる巫の儀礼を紹介し、口承文芸(韓国では「口碑文学」)の視点から考察を加えるものである。

## 2 「ソンニムクツ」(손님굿)

韓国において、天然痘が登場する巫儀として注目されるのが「ソンニムクツ」(손님굿)である。歴史ある儀礼であって、現在も各地で伝承が引きつがれている。この名称は、二つのジャンルにまたがる語であって、巫が執り行う儀礼の名称「ソンニムクツ」をさし、またその儀礼で口演される巫歌の「ソンニムクツ」をもさす。巫歌の方は「ソンニムクンノレ」(노래は歌)とも呼ばれる。

この儀礼、巫歌がどのようなものかを見るにさきかけ、現在の韓国の「巫」について、ごく基本的な事項だけをまず確認しておきたい。

朝鮮半島において儀礼を執り行う「巫」は、ムーダン(무당)、

タンゴル(당고), シムバン(심방), そして尊称の意味をもつマンシン(만신), と呼ばれている。これらの巫は、司祭者・巫医・予言者というおよそ三種類の役割・機能をはたすと指摘できる。

これらの巫が執り行う本格的な儀礼を「クツ」(굿)という。クツは、その目的と内容から、祈福祭・治病祭・死霊祭の大きく三分類できるが、福を祈り、病気を治し、死霊をまつる儀礼であって、つまるところ「巫」は、人の誕生(出産も含む)から死までの一生と、さらに死後をも管掌する存在であると言えるのである。

筆者は、韓国と日本において巫の儀礼を多く見てきた経験から、朝鮮半島の「巫」は、人の生と死におけるさまざまな問題と苦しみを解きほぐして、「寿福」を人びとにもたらそうとする専門的職能者であると、実感し理解している。

さて、治病祭の一つが「ソンニムクツ」である。本来、天然痘の患者がいる個人の家で行われるものであった。そして地域共同体においても、感染者が出た場合や、疫病予防を祈願して行われてきた。

たとえば、韓国の東海岸地域(釜山から江陵に至る一帯)の多くの共同体で、数年ごとに行われる「ピョルシンクツ」(별신굿 別神クツ「マウルクツ」ともいう)は、共同体の安寧と豊饒を祈願する祭儀であり、その中にも置かれている。

また各地の歴史ある祭儀でも行われているが、その代表とな



江陵端午クツの一場面 2002.6.15 筆者撮影

るのが江原道江陵市の「江陵端午祭」<sup>カンスンタノジユエ</sup>である。この祭りの中心に位置する「タノクツ」(단오굿 端午クツ)は、三〇名前後からなるタンゴル巫と楽士によって執り行われる儀礼で、その一つの祭次に「ソンニムクツ」が配されている。

### 3 天然痘の名称——人びとはどう呼んだのか？——

予防医学が発達する以前、病気は、鬼や悪霊、神霊の怒り、たたりなどと関連づけて捉えられることが多かったが、「ソンニムクツ」の場合はそうではなかった。

結論をここで先に言えば、「ソンニムクツ」は、天然痘にかからせる存在を、外界からやって来る客<sup>客</sup>と捉え、神<sup>神</sup>と捉えているのである。

天然痘が朝鮮半島で歴史的にどう呼ばれていたか、まずその呼称に注目する必要がある。以下で確認しよう。

#### (1) 痘瘡(두창) トウチャン

朝鮮王朝時代の文献記録を見れば、この病気を「痘瘡」あるいは「痘疹」という漢字で表記しているのが確認できる。「痘瘡」の「痘」の字は、発疹・できものを意味する。すなわち発疹・できものが出る病気という意味になる。

天然痘の症状が、顔や体に出てくる発疹・できものが「豆」に似ていることから、「痘」の字をつかって「痘疹」と名付けら

れたという。したがって治癒したあとの痘痕(あばた)も、ほぼその大ききで皮膚に残ることになる。

同じように発疹が出る伝染病が「はしか」である。しかし、その発疹は小さいもので、「麻」の種に似ることから「麻疹」の名がついたとされる。民間では、「紅疹」(홍진、ホンジン)という呼び名の方が多く使われている。これは発疹の色が紅色であることから付いた名である。また症状を見ると、麻疹(はしか)では、発疹が顔面よりも体に多く出るし、何よりも治癒後に、痕<sup>痕</sup>などは残らないのである。痘瘡(天然痘)の方が麻疹よりはるかに強く恐れられた理由が、まさにこの点にあった。

なお天然痘が撲滅されて以降は、「痘瘡」の語に麻疹も含めて使用されることが多い。

#### (2) 「ソンニム」——外来の客<sup>客</sup>であり神<sup>神</sup>である——

この恐れられた痘瘡(天然痘)をもたらしのはいったい何者なのか。現在では、それをウイルス(Virus)であると医学的に認識しているが、かつて朝鮮王朝時代にはどのように捉えていたのだろうか。

その答えは「ソンニムクツ」の「ソンニム」の語にある。「ソン」は「客」を意味し、「ニム」は「さま」にあたる尊称で、「ソンニム」を直訳すれば「お客さま」である。しかし、単なる客ではなく、神<sup>神</sup>、だという。

巫歌の原文を見よう。これまで報告のあった採録本のなかで

を残す疫病である。決して侮ってはならないという認識が強かったからと理解できる。

#### (4) 胡鬼、戸口(호구) ホグ

しかしながら、やはり「鬼」とする呼称があった。それが「胡鬼」である。

この儀礼の名称は、地方によってさまざまであって、先述した江陵や東海岸地域の「ソンニムクツ」以外に、湖南(全羅南北道)地域では「ソンクツ」、済州島では「マヌラ拜送クツ」(마누라배송굿)と呼び、そして、ソウルおよび中部地域では「ホグロリ」(호구거리)と呼ばれている。

この「ホグ」には、漢字の「胡鬼」や「戸口」が当てられているが、「戸口」の字に読みとれる意味に留意すべきである。「戸口」の字には、家々ごとに戸口から入ってくるという意味が読みとれ、つまりは伝染する病気、外界からやってくる病気、という認識が表われていると筆者は考える。

そして、やって来るのが「神」ではなく、鬼<sup>鬼</sup>だと明瞭に示したのが「胡鬼」である。「胡」という漢字は、中国大陸の北方や西方の異民族をさす語であるが、そこには、未開民族と見る若干の蔑視の意味を含むという一般の理解にてらせば、外界から侵入してくる、鬼<sup>鬼</sup>がもたらす病気、という認識があったことがわかる。上掲した呼称のなかで、もっとも呪術的な名であり、本来的なものといえる。

最も古い「ソンニムクツ」には、(筆者日本語訳。以下同)

むかしむかし、はるかにむかし……

江南の大ハン国の、善き明神のソンニムは、有名であり、明鑑である

座つても三千里を見わたされ

立つても三千里を見わたされる

わが朝鮮国は、人が善いとお聞きになり、食べ物も良いとお聞きになって

それはいいとお聞きになって、わが朝鮮国へ来られるとき<sup>(3)</sup>とあり、本縁語りのなかで「明神」だとし、遠く江南の国から朝鮮国へとやって来た、客神<sup>客神</sup>とし、その道行を語っている。

#### (3) マーマ(마마)

さて、もう一つの名称が「マーマ」である。民間では、この「マーマ」の方が多く使われている。「マーマ」に漢字の「媽媽」をあててはいるが、固有の朝鮮語である。もともと王や王族たちの称号に付けて尊待をあらわす語であった。のちには身分の高い女性につけるようにもなった。ソンニムに尊称のマーマをつけ「ソンニムマーマ」と丁重に呼ぶが、略して「マーマ」だけでなく、天然痘の神「痘神」をさす語となっている。

悪病であるにもかかわらず、丁重さと崇仰をもって呼称しているのはなぜなのか。それは天然痘を非常に恐れたからにほかならない。突然やってきて人びとを死に至らしめ、痕(あばた)

#### 4 「ソンニム」をどう迎えるのか―歓待か、冷遇か

さて、巫歌が語る神話の内容を見ていこう。

本稿が重要視したいのは、朝鮮国にやって来た「ソンニム」に対し、人びとがどう接しどう応対したのか、その結果はどうであったか、という点である。

ソンニムは、いろいろな人物、「船頭」<sup>トサゴ</sup>「ノグ婆さん」<sup>ハルメ</sup>「金長者」<sup>キム</sup>「クテ進士」をたずねるが、その人物たちがソンニムにどう応対したのか、ソンニムの威力・霊験がどのように語られているかに視点をおき、見ていく。

最近出たバクヘミ論文<sup>4</sup>に、「賓順愛(빈순애) ピンスネ」<sup>4</sup>「タングル巫が二〇一八年三月三日に江原道東海市大津洞で口演した「ソンニムクツ」採録本の紹介があり、最新の採録資料として貴重である。以下、本文はこれによる。



민순애(賓順愛)  
国家指定芸能保有者(人間文化財)

本縁を語り、朝鮮国にやってくるのは、セジョンソンニム(セジョンは漢字「世尊」)

カクシソンニム(カクシは漢字「閻氏」をあて、若い女性の意)

けてほしいと祈ったので、一人だけは放たれた。

ソンニム神は威力で舟を作り鴨緑江を渡っていった。日が暮れたので、灯りのともった藁屋のノグ婆さんに一夜の宿を求めた。ノグ婆さんは、ソンニムが来られるならお迎えに行きましたのみに、みすばらしい家ですがどうぞと言つて、川辺で口をすすぎ手と顔を洗い、家を掃き清めてから、ソンニムを招き入れて浄座に案内した。そして淨い水(井華水)を三つ小膳に供え、貧しいながらも心をつくくしめてなした。

ノグ婆さんは、大金持ちの金長者の家に行き米を貸してほしいと頼んだが、金長者はノグ婆さんを門前払いし、その女房は台所の土間に落ちていた鼠の糞まみれの米粒ならあげると言った。さらに金長者は、ソンニムがやって来ると聞いたので、あわてて息子のチョリヨンを寺に送って身を隠させ、門の前には馬の糞をばらまき、唐辛子をまき散らし、俵を燃やして煙をくすべて、ソンニムが家に近づけないようにした。

怒ったホンヨクソンニムは、息子のチョリヨンに罰をあたえ(感染させて)金長者を改心させようとしたが、金長者はなおもソンニムを騙し悪行を続けたので、息子の命を絶ち切った。そして金長者の財産は消えて無くなり、金長者の家は滅んでしまった。その財物はノグ婆さんに送られて婆さんは豊かになった。息子チョリヨンは、親がソンニムを迎えず自分を助けなかったことを知り、ソンニムの馬引きになつて仕えた。

次にソンニムは、クテ進士の家に行った。クテ進士はソンニム

ホンヨクソンニム(ホンヨクは「紅疫」。ホバン(虎班)とも)

という三神であると語り、そしてこれら三神のもつ威力について、

そのとき、セジョンソンニムは子孫に命を与えに來られ、ホンヨクソンニムは発疹をつくりに來られ、カクシソンニムは、美人につくるうと思えば美人につくり、チェボにつくるうと思えばチェボにされるのであるが、

と、まず説いている。つづいてソンニム神の立派な容姿・いでたちと、乗ってくる輿や馬の飾りつけを「物揃え」で語っている。三神の中では、カクシソンニムが、若く美しく自尊心が高い女神に描かれている。

ソンニムたち三神は、朝鮮国への入り口になる義州に到着したが、大河の鴨緑江を渡る舟がなかった。そこで船頭に舟を借りようとした。すると船頭はあれこれ理由を付け、舟はないと断つた。ところが、美しいカクシソンニムを見るや船頭は、自分に一晩の夜とぎをするなら舟を貸してやろうと言うのであった。

これを聞いたカクシソンニムは烈火のごとく怒り、船頭をつかまえて首をはね、鴨緑江にほうり投げた。それでも怒りがおさまらないカクシソンニムは、船頭の家に行き七人の息子をみなつかまえた。ソンニム神が来たことを知った船頭の女房は怖れて、浄水を供え、後を継ぐ息子なのでどうか一人だけでも助

ムを丁重に迎えてなした。ソンニムは、死にかかっていた孫を助ける方法をクテ進士に教えたので、孫の命は助かり、家は栄えた。

あらまし以上のような内容の神話語りである。ソンニム神を迎え歓待したノグ婆さんは豊かになり、クテ進士は孫が生き返って家は栄えた。ソンニムを迎えず冷遇した金長者は、息子を亡くし財産を失い家は滅んだ。このような来訪神の待遇モチーフは日本の「蘇民将来」説話などとの対比が興味深い。巫は、

霊験あらたかなソンニムを蔑ろにせずきちんと定め、浄水を供え浄座にしっかりと丁重に迎えて、この大津洞に子孫が、這う赤ん坊やにこにこ笑う子が生まれたら、病気にかかることなく、寿命を与えてくださり福を与えてくださるよう

と、この儀礼の目的と意義を冒頭でわかりやすく述べている。

そうして巫は、手に持つ「シンテ(神竿)」を集った人たちの頭の上を振り払いながらぐるりと一回りする。そのとき人びとは、シンテの紙しでお金を結び祈願するのである。

#### 5 「ソンニム持送クツ」―天然痘の神を送る―

さて、これまで見てきた「ソンニムクツ」だけで儀礼は終わ

らないことに、留意しなければならない。患者がいる個人の家の場合、治っていくころに「ソンニム拝送クツ」という儀礼が執り行われる。患者のいる家から、あるいは共同体の境域から、痘神を送り出す儀礼である。

ここで「拝送」という表現である点、重要である。お送りするという意味の「拝送」である。心情としては「追放」する。追いつく、ではあるが、神の前ではそういった表現は決して使わない禁忌語である。どこまでも丁重に迎え送らなければならぬ恐ろしいソンニムなのである。

したがって、お送りするためには、まずソンニムが乗る「馬」を準備しなければならない。神が乗る立派な馬であることが、「マルチレ」(馬ぼめ、馬の飾りたて)という一文で語られている。馬の、

頭、耳、鼻、口、背、腹、脚、尾

という部分を、一つ一つとりあげ、リズムにのせて次々とほめていく「物揃え」の方法であり、日本の語り物にも多く、作品「馬揃」と同様のものといえる。おもしろいのは、尾のあとに二つの性器までもとりあげていることで、これは笑いをさそう滑稽表現にほかならず、物揃えの最後に差し入れる滑稽化の手法なのである。

さて、このようにソンニム神の立派な馬が準備されたが、このあとの展開は、古くからの方法はとらず改変と簡略化がほとんどされていて、賓順愛採録本は、独自のものになっていた。

然痘) だけでなく麻疹(紅疹)もふくめ疫病がはやっただけに、どうすればいいかを教える儀礼としてあったこと、そして「ソンニム拝送クツ」は、疫病にかかったとしても、どのようにすれば病気を軽く速く治すことができるかを教えてくれる儀礼としてあったことが、明らかとなった。

これらの儀礼によって、疫病の恐怖と不安のなかにあった患者と家族、そして人びとに、安堵と安心感をもたらされたと評価するならば、それこそは、巫がなせる「精神的治病」と言えるものである。

賓順愛タンゴル巫は、本採録本の儀礼において、始めるとまず、なぜこの儀礼をするのかを説いているが、そのなかに、二〇一五年に世界を襲った感染症「マーズ MERS」(中東呼吸器症候群)が韓国でも流行し人びとを苦しめたことを、そしてまた二〇一七、八年当時はやっただ病「帯状疱疹」のことも引用しながら、「ソンニムクツ」儀礼の大切さ、重要性を説いていた。まさに現実の問題を、*今*を生きている人びとにとって切実な疫病の問題を語り取り入れた、新しい伝承のすがたを見せていたのである。

今後、「ソンニムクツ」は、まちがいがなく伝承されていくであろう。人びとに安心と安堵をもたらす巫儀として、口承文芸として。

かつて天然痘患者がいた時代の方法というのは、たとえば次のようなのである。

萩の木で馬のかたちを編んで作り、藁で小さな俵(オジェンイ)を三つ作って馬の背に載せ、青・赤・黄三色の旗を立て、俵の中には餅とご飯を入れ、お金も入れたという<sup>(9)</sup>。そしてこの馬を遠くの木に逆さにつないで置いて、儀礼が終わると遠くに持っていく、捨てたり、燃やすということが行われていた。

しかし賓順愛タンゴル巫は、祭儀場の一人の男性に「馬」の役になってもらい、自身も「馬引き」となって「さあ、ソンニムをお迎えに行くよ」と言い、観衆も参加して遊び楽しむ一幕をつくりだしていた。それはまさにそこにいる全員が、「ソンニム神」を送り出すことを、実感できる場、そして送り出して「安堵」できる、そのような場であった。

このような祝祭の場をつくりだせる巫は、まさしく祭りが何かを知る「演出家」であるといえよう。神をまつる儀礼の場を、笑いがあふれる遊戯(ノリ)の場にもつくりかえることこそが、韓国のタンゴル巫たちが備えるところの優れた技能の一つなのである。そしてそうした場は、実は、集った観衆たちが望み求めるものであったことを、見過ごしてはならない。

おわりに

これまでの考察を通して、「ソンニムクツ」儀礼は、痘瘡(天

注

- (1) 国立感染症研究所ホームページ (<https://www.niid.go.jp/niid/ja/>) の「天然痘(痘そつ)」項
- (2) 「江陵端午祭」は重要無形文化財第13号(一九六七年指定)、ユネスコ人類無形文化遺産(二〇〇五年指定)である。「ソンニムクツ」については、黄縷詩の解説「江陵端午クツ」(『江陵端午祭白書』一九九九)と「デジタル江陵文化大典」(韓国学中央研究院ホームページの「郷土文化電子大典」)に詳しい。参照されたい。
- (3) 金泰坤採録「ソンニムクツ」『韓国巫歌集1』一九七一集文堂 二二七頁。(一九六八年一月十八日江原道江陵市林塘洞において朴月禮マンシン(七十九歳)より採録の資料。)
- (4) バクヘミ「ソンニムクツ」の伝承様相(参考文献に掲出)
- (5) 賓順愛氏は、一九九一年に履修者に、二〇〇〇年七月に「江陵端午祭」芸能保有者に認定され、広く活躍する大巫である。
- (6) 「チェボ」は、兎唇の人をさす語だが差別感がある。
- (7) 「つかまえた」は、天然痘に感染させたという意味であり、息子らは、背が曲がり、耳が聞こえず、目が見えず、足が不自由になったと説いている。
- (8) これらの行為はすべて天然痘に関わる禁忌行為であった。天然痘の禁忌は非常に多く厳しいものであった。
- (9) 「物揃え」表現、「馬揃」、滑稽表現については、拙著「語り物の比較研究―韓国の巫歌・パンソリと日本の語り物―」(二〇〇二 翰林書房)で詳論している。

(10) 『韓国民族文化大百科事典』一九九五 韓国精神文化研究院  
(現在の韓国学中央研究院)の「ソンニムクツ」項参照。

二〇〇八

シンヒラ「江陵端午クツ」伝承者研究」二〇一五 カトリック関

東大学大学院碩士論文

パクヘミ「ソンニムクツ」の伝承様相—江陵端午クツ伝承巫女の  
ソンニムクツ採録本を中心に—」二〇二〇、二 韓国芸術総合  
学校芸術専門士論文

参考文献 (年代順に掲出。韓国語文は日本語訳した)

李能和「朝鮮巫俗考」『啓明』第19号 一九二九 啓明俱樂部

金泰坤「韓国巫歌集1」一九七一 集文堂

崔正如・徐大錫『東海岸巫歌研究』一九七五 螢雪出版社

柳東植「朝鮮のシャーマニズム」一九七六 学生社 (日本)

徐大錫「韓国巫歌の研究」一九八〇 文学思想社

金泰坤「韓国巫俗研究」一九八一 集文堂

崔吉城「韓国のシャーマニズム」一九八一 弘文堂 (日本)

金泰坤「韓国の巫俗神話」一九八五 集文堂

金仁會「韓国巫俗思想研究」一九八七 集文堂

黄縷詩「ムンダンクンノリ研究」一九八七 梨花女子大学大学院

博士論文

金善豊・金秀南 (写真)『韓国のクツ19 江陵端午クツ』一九八七

悦話堂

徐大錫・朴敬伸『安城巫歌』一九九〇 集文堂

金善豊『江陵端午祭実測調査研究書』一九九四 韓国文化財管理局

曹敬燉編『江陵端午祭白書』一九九九 江陵文化院

黄縷詩「東海岸クツの伝承状況と特徴」『韓国巫俗学』第17号

二〇〇八

李杜鉉「マーマ拝送クツ」『韓国文化人類学』第41卷2号、

付記  
二〇二〇年度の「江陵端午祭」は、新型コロナウイルス感染症の防疫対策によってオンラインでの実況中継が行われた。六月二十四日(旧五月四日)から二十八日まで挙行された〈단오祭〉(端午クツ)のすべての儀礼をユーチューブで鑑賞できる。朴琴天巫の「ソンニムクツ」は二十五日にあり、「コロナ19」をとりあげ祈願していた。巫と楽士だけでなく、例年のような観衆が参加した生き生きとしたクツ儀礼の臨場感までは望めないが、黄縷詩教授の解説も付いておりぜひ参照されたい。

〈2020 온라인 단오제〉 <https://2020.danoffestival.or.kr>

(びよん・うんじょん / 元関西外国語大学助教授)

### 【緊急特集】 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究

## カランチン期ロシアのフォークロアより

熊野谷 葉子

### ロシア・フォークロアのユーモア

ロシア・フォークロアにおいて笑いは重要な位置を占めている。昔話の艶笑譚や政治風刺のアネクドット(小話)が有名だが、その他にも、なにげなく慣用句やことわざを言い換えたり、高貴な格言や文学の有名な詩句をパロディ化したりして、ロシアの人々は日々笑いのフォークロアを生み出してきた。そのユーモア精神は困難な状況にあるほどかきたてられるらしく、ソ連時代の言論の不自由な状況下で、あるいはソ連崩壊後の苦しい生活の中で、人々は困っている自分たちの姿を客観的に観察し、それをユーモラスに描いて笑い合ってきた。そうした笑いのフォークロアのテキストは、口頭で語られて証拠を残さないか、路上などで売られるホチキス止めの小冊子となって手軽に消費された。

しかし二十世紀、ロシア経済が何度も深刻な危機に見舞わ

れつつも成長し、生活が向上して国力に自信がついてくると、こうした笑いは輝きを失った。誰もが忙しく仕事をこなし、ひっきりなしに流れる写真と動画と文字を目で追う暮らしは他の先進諸国と変わらない。かつてはよく見られた、路上での知らない者どうしの政治談議やキツチンの片隅でのアネクドット大会は、誰かのギターに合わせて皆が歌うという光景同様、レトロな思い出になりつつあった。そうした中で、笑いの復権が見られたのが、二〇二〇年三月に始まったコロナ禍中の暮らしである。

### 「カランチン」の春

二月にはまだ「中国の感染症」扱いだった新型コロナウイルス感染症は、三月に入るとロシアでも急速に広まり、政府の対応も極めて早かった。感染者がまだごく少なかった三月上旬から次々に入国制限や休校の措置がとられ、私も三月七日に予定